まとまりのある文章を書くことの指導
－教科書を活用した表現の能力の育成－

山岡　大基

2006年度高校1年生において，英作文の指導，特に内容的にまとまりのある文章を書くことの指導を重点的に行なった。高校生が英語で文章を書く場合，個々の文の文法的正確さにのみ注意が向けられ，文章全体の構成にまとまりが見られなかったり，文章に盛り込むべき情報の吟味が十分でなかったりすることが多い。これは，一面では生徒の英語使用経験が未だ貧弱であることに起因するものであり，書くことの技能に特有の問題というよりは，全般的な英語力の問題であるといえる。しかし，その一方で，そのような要素に対する生徒の意識が低いことも事実であり，そこに明示的な指導を行なうことにも意義がある。そのような考えから，本年度は「英語Ⅰ」において，まとまりのある文章を書くことに対する生徒の意識と技能の向上を図る指導を試みた。本稿ではその概要を報告する。

1．まとまりのある文章を書くことの指導の必要性

中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会での議論において，

> 教育課程実施状況調査では，書くことが良好ではなく，特に内容的にまとまりのある一貫した文章を書く力が十分身に付いていない。このため，文字や符号を識別し，正しく読み，書くことができることを確実に定着させることはもとより，文レベルでなく文章レベルの訓練が必要ではないか。

という指摘がなされているように，中学生・高校生にとって，外国語である英語でまとまりのある文章を書くことは容易なことではない。母語であれば，書く内容と文章全体の構成，個々の言葉遣いなどを同時並行的に処理しながら文章を書くことができる。しかし，外国語においては，まず個々の文を書くことに意識が偏りがちであり，1文を書くごとにその都度思いつく内容を書き連ねていくだけの，全体としての内容のまとまりや論旨の一貫性に欠ける文章を生み出す結果となりやすい。

本年度4年生に関しても，附属福山中学校の出身者については，中学時に300語程度の文章を書く機会が何度かあったが,「まとまりのある文章」という観点から作品を見れば，その多くは改善の余地が大きいものであった。

したがって，単に一定の分量の文章を英語で書いたからといって，それが即「まとまりのある文章」になるというわけではない。このことを踏まえると，まとまりのある文章を書くことの指導においては，書こうとしている文章全体の構成や，盛り込むべき情報についての構想を生徒に持たせることが重要であるといえる。

2．「型」の指導と教科書

まとまりのある文章を書くためには，書こうとしている文章全体の構成を構想する必要がある。文章の構成や情報の提示の仕方には，書く内容や語数等の形式的条件に応じて変化する部分もあるが，おおよその「型」とも呼ぶべきパターンがあり，この「型」を指導することは有益なことであると考えられる。

上條（2006）は，小学校国語科における作文指導について述べる中で，文章の型を「文章表現の型」と「文章構成の型」の2つに分類し，次のように述べている。

> 文を書く時，なるべく破りたいのは「文章表現の型」である。（中略）型にはまった表現は，書き手の個性的な見方・考え方を殺してしまうことが多い。しかし「文章構成の型」は，できる限り利用した方がいい。例えば序破急の三段構成，起承転結の四段構成…などの文章構成の基本形である。また，頭括型，尾括型，双括型などの文章展開の型も利用できる。構成・展開の型は，読み手に内容を効果的に伝える。（p.71）

これは高校英語においても同様で，個々の文の正確さにばかり注意を向けるのではなく，文章の「型」を意識することで，より効果的にコミュニケーションが図られることを指導するのは重要なことであるといえる。

では，授業の実際を考えた場合，どのような「型」を指導すべきであろうか。現行の高等学校学習指導要領には，個別具体的な「型」は示されておらず，「英語の文章の流れ」や「文章の構成や展開」という文言で一般的に言及されているにすぎない。

そこで，まず，本実践は「英語Ⅰ」におけるものであることを踏まえ，「書くこと」を他技能と連係させること，また授業時数等の実際的制約に見合う指導とすることを重視し，教科書の教材文を「型」のモデルに設定することとした。じっさい，本年度使用した「英語Ⅰ」教科書（開拓社 *New Legend English I*）には，科学的話題に関する説明文，物語文，対話文，特定の人物の自叙伝など，さまざまな文種（ジャンル）の教材が含まれていることから，「型」モデルの多様性は確保されているといえ，生徒が文章を書く際のモデルとして用いることに問題はなかった。

3．指導の実際

書くことの指導については，生徒が作品を実作する機会は，ほとんどの場合，授業外の課題という形で設け，授業においては主に読むことや語彙・文法などの言語材料の指導を行なった。これは，書くことを他の要素から独立させたということではなく，授業で指導した内容と関連させた内容を宿題という形で生徒に取り組ませた，ということである。

より具体的には，授業では読むことの指導に多くの時間を充て，その中で教材文の持つ構成や表現の特徴についての指導を行い，その学習を踏まえて生徒が実作する，という過程である。

生徒の書いた作品については，教員からのフィードバックだけでなく，生徒同士のフィードバックが与えられる機会も設けた。また，条件が許せば，そういったフィードバックを元に生徒自身が書き直す機会も設けた。

以下，そのような指導の具体例をいくつか挙げる。

3．1．文章構成の観点から

Lesson 1 "The Two Sides of the 21st Century" は，21世紀という時代の肯定的な側面と否定的な側面を並立させて述べる構造を持った説明文である。例えば次のような箇所がある。

> Some people are very excited about the 21st century. They expect a better kind of life because of advances in science and technology.
> …（中略）…
> Some people are worrying about the developments and advances in science and technology.

2つの異なる立場が，Some people を主語とする2つの文によってわかりやすく対比されている。

この課の教材文では，21世紀の肯定的側面と否定的側面が並立させて述べられているが，いずれかの側面のみを強調することはなく，単に2つの異なる立場を紹介するところで文章が終わっている。

これを「両論併記」の型と名づけ，授業においてその特徴に着目させたうえで，以下のような課題を出した。

> 次のトピックから，自分が論じるものを1つ選びなさい。
> ・部活動をかけもちすることの是非
> ・高校生が校則で決まった制服を着用することの是非
> ・学校にはチャイムがある方が良いか，ない方が良いか
> ・紙の辞書の方が良いか，電子辞書の方が良いか
> 選んだトピックについて「両論併記」の型に則り，英語で論じなさい。（70～100語程度）

中学時に長文の英作文を経験していない生徒がいることも考慮して語数指定には幅をもたせたが，ほとんどの生徒が80語以上で書き，100語を超えて書く生徒も少なくなかった。生徒作品の具体例を１つ挙げる。

> 「紙の辞書の方が良いか，電子辞書の方が良いか」
> Many people – like my mother and teachers – say that using a paper dictionary is better than using an electronic dictionary. They also say that a paper dictionary gives us more knowledge and it will keep in our memory forever. A paper dictionary make us more clever.
> But many students think that using a paper dictionary is very troublesome. And it is hard to bring the school. They also think that an electronic dictionary very useful and it is easy to bring the school.（83語）

また，同教材中に次のような箇所がある。

> It is certain that many factories produce good things today. But at the same time they have caused many problems. They have caused a lot of damage to the earth and our life. They pollute the air and water. They also fill up land with garbage and use up trees and oil.

これは，21世紀の否定的側面について述べている部分であるが，いったん factories の肯定的側面を認めたうえで，それに再び反論するような形で否定的側面を述べている。「両論併記」が2つの立場を対等に並置しているのに対し，このような構造は，一方の立場を支持し，それを説明するために他方の立場にも言及するという点が異なる。

上記の箇所は教材文においては局所的に見られる論理展開であるが，「両論併記」を発展させたものがこの構造であると考えられるため，これを「譲歩→反論」の型と設定し，先の「両論併記」の文章を書き換える課題を

生徒に課した。

上と同じ生徒が書き換えた作品が次のものである。

> Many people − like my mother and teachers − say that using a paper dictionary is better than using an electronic dictionary. They also say that paper dictionary gives us more knowledge and it will keep in our memory forever. A paper dictionary makes us cleverer.
>
> But many students think that using a paper dictionary is very troublesome. And it is hard to bring to the school. They also say think an electronic dictionary very useful and it is easy to bring to the school.
>
> Using an electronic dictionary is certainly very useful and it is easy to bring to the school. But, teachers' order is absolute! (105語)

最初の2パラグラフはほぼ最初の作品と同じであり，第3パラグラフにおいて「譲歩→反論」の型を作ろうとしている。この作品の場合，自分の立場を最初に明確にしたうえで，対立する立場にいったん譲歩する，という展開はうまく作ることができていないが，第1パラグラフと第3パラグラフの論旨をなんとか一貫させようとしていることは見て取れる。

3．2．情報の配列法の観点から

Lesson 9 "Illusions" は錯視現象の原理を解説する文章であるが，4つのセクションのうち，最初のセクションと残りの3つのセクションで，情報の配列の仕方が好対照をなしている。最初のセクションでは，まず具体的な錯視画像を提示し，読者の興味を引き付ける。次に，そこで生じる錯視現象がどのようなものであるかを説明し，最後にそういった現象を引き起こす科学的な原理の解説を行なう。これは，意見文でいうところの「尾括型」の構成に類する構成といえる。

いっぽう，残りの3つのセクションでは，まず主題となる科学的事実が提示され，その後に，その事実によって引き起こされる具体的な錯視現象が紹介される「頭括型」の構成を持っている。

そこで，これら2つの構成を，それぞれどのような意図で用いられているのかという点から対比し，それぞれの特徴を明らかにした（資料①）。そのうえで，教材文で扱われていない錯視画像を提示し，教材文をモデルとして参考にしながら，その画像を説明する文章を生徒に実作させた（資料②・③）。

このような情報の配列法に関しては，他にも「時系列」や，「起承転結」といった型について指導を行なった。

3．3．表現技法の観点から

文章のまとまりや論旨の一貫性と直接的な関係はないが，教科書教材に見られる文章表現上の工夫にも適宜着目し，指導を行なった。

Lesson 3 "Ozone Destruction" はオゾン層破壊に関する科学的な説明を行なう文章であるが，その中に，グラフや数字を提示し，それについての説明を加える部分がある。

たとえば次のような表現が見られる。

> ・They found that as much as three percent of the ozone has been destroyed . . .
>
> ・Scientists say that as many as seven percent more cases of skin cancer can be expected when each one percent of the ozone is destroyed.

これらは，単に数値を紹介するだけでなく，その数値に価値判断を与えたり，あるいは他の数値と比較してそれらの関係を述べたりする表現である。

このことに関して，遊びの要素も取り入れつつ，生徒が自分で適当にグラフを作り，その数値について説明をするという活動を行なった。（資料④・⑤）

また，Lesson 8 "How My Career Began" は，ある実在の女優がメジャー・デビューを果たすまでの劇的な実体験を綴った自叙伝である。そこではさまざまなできごとが描写されているが，その重要度に応じて描写の密度がかなり異なるという特徴がある。たとえば，次の3つの箇所はそれぞれほぼ同じ語数を用いて描写されているが，それらが描写する場面の時間には相当の違いがある。

> ①Before leaving for the theater I wrote my notice, intending to hand it in that night. I hurried to the station. There I discovered that the train was late. I arrived at the theater half an hour late. "Where have you been?" the producer asked.
>
> (45語)
>
> ②The curtain went up. Taking a deep breath, I made it to the center of the stage. The audience became quiet. Out there were the most important people in show business. I took another breath and spoke the first line. My voice was far too loud.
>
> (46語)
>
> ③Now -- the music stopped. We turned our backs to the audience. Together we let the hats roll from our heads down our arms, threw them high into the air and -- then it happened. I dropped my hat. It rolled to the edge of the stage. (45語)

これは，単位時間あたりに費やす語数が多くなるほど描写が細かくなるということを如実に示す例であるといえる。

このことを踏まえ，本年度4年生が実際に書いた作品のうち，描写の密度という観点において改善の余地が大きいと思われる典型的なものを，本人の了解を得て教材として他生徒にも提示した（資料⑥）。そして，どの部分の描写の密度を高めるとより良い作品になるかを検討させ，加筆を行なわせた。（加筆に当たっては，実際の状況が不明なので，創作してよいとした。）

資料⑥で分けられた４つの部分のうち，３番目の部分に加筆した例が下のものである。

> At last we reached the final game. Our hearts were full of hopes. But we despaired the moment. We knew the rival's name. Because the rival was the strongest team in the district. But we did not give up winning the victory, because our captain said to us, "We won many games. We are strong. If we never give up, we will be able to win the victory. Try our best!" Thanks to his words, we could believe our winning.
>
> The game was one side game. But we kept our goal very hard. I concentrated all my attention on my game. Then the rival's captain ran here to score a goal. I concentrated my attention to save it. He kicked the ball at the goal. The ball was coming with great force. I thought to my self, "If I can't catch it, our team lose this game. I can save it. I can save it." I jumped at the ball. I saved my goal! We won the victory.
>
> After the game, I was on the edge of my seat. Every my teammates' faces driped with sweat all over. I was very glad. Our friends and my family were very glad, too.

原文では67語であったのが201語にまで分量が増えており，1つ1つの場面により鮮明な描写が加えられている。

４．反省と展望

４．１．「英語Ｉ」における書くことの指導

以上，2006年度「英語Ｉ」において行なった，まとまりのある文章を書くことの指導の概要を紹介した。

「英語Ｉ」は「ライティング」よりも前に履修するものとして位置づけられている。このことを踏まえると，「英語Ｉ」においては，生徒を書くことに慣れさせることと，本格的な指導への準備段階として，書くことの技術に対する意識を高めることが，まずなすべきこととして挙げられるだろう。

４．２．今後解決していくべき課題

大内（1997）は，作文技術の指導には，「知識理解」「技能訓練」「応用実作」という３つの段階があるとしている。本実践をこれに照らしてみると，「技能訓練」の要素がきわめて薄いことがわかる。「英語Ｉ」における取り組みという制約があったにせよ，書くことの技術を生徒に定着させるという点では，これは反省すべき課題であろう。

また，大森（2005）は，国語科教育における読みと書きの「関連指導」について次のように述べている。

> 私の授業は，文章構成を子どもに学ばせ，その文章構成をまねて作文を書かせるということを目標にしていた。結果はどうか。まったくつまらない作文ができあがった。（中略）いまにして思えば理由がある。文章を書く技術を子どもに教えていなかったことがその理由である。文章構成を知ったからといって文章が書けるはずなどないのだ。文章とりわけ文の指導こそしなければならなかったのである。（pp.158-160）

当然のことながら，この指摘が本実践に適合するとは即断できない。しかし，「まとまりのある文章」を書くために文レベルでの指導を行なうというのは本実践に欠けている視点である。また，そもそも，そういった技術を何の目的で用いるのか，つまりコミュニケーションにおいて，それらの技術がどのように有効であるかを生徒に自覚させるような指導を，より工夫すべきであった。

さらに，生徒作品の実例にも見られるように，1文ごとの正確さも未だ確立されていない。文章レベルでの指導と並行して，1文を正確に作る指導がまだ必要である。

［参考文献］

大内善一．1997．「『反論の先取り』の作文技術」（日本言語技術教育学会．『言語技術教育６論理的思考力を鍛える作文技術』pp20-24所収）．明治図書．

大森修．2005．『大森修国語教育著作集 第3巻 作文指導の秘訣』．明治図書．

上條晴夫．2006．『書けない子をなくす作文指導のコツとネタ』．学事出版．

文部科学省．1999．『高等学校学習指導要領解説 外国語編 英語編』．文部科学省．

文部科学省．2006．「審議経過報告（抄）」（中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会配布資料 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/004/06091107/004/005.htm）

資料①

Lesson 9　Illusion（4年生後期　目的を持った読み・書き）

[1]と[2]を、説明法という観点から対比してみる

■Dictation [1] Your Brain Is Sometimes Fooled

[　　]　← 読者の注意を具体的に向ける

Which man is taller?　← すかさず問いを発して読者を引き込む

[　　] you will say figure B,　← 読者の反応を予測して先回りする

[　　]　← 読者の予測に反する事実を提示する

measure the two figures,

and [　　] that they are both the same size.　← 説明法のプロセスに読者を参加させる

The railway lines and telephone lines follow the rules of perspective drawing,
while the figures do not,
though the eye still records the figures along with their surroundings.　← 科学的説明の提示

[　　]　← 題材を提示してたたみかける

Look at the two thick lines in drawing (2).
Are they straight or are they curved outwards at the center?

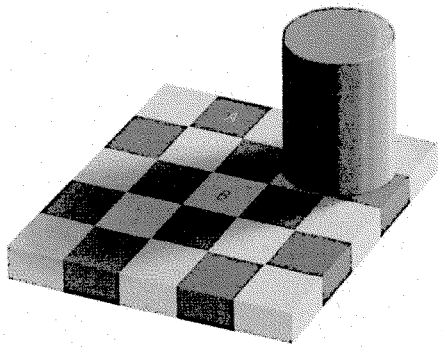
They [　　] look curved, [　　] a ruler placed along them will prove them to be [　　] straight and parallel to each other.　← 実測

Each of these drawings is an illusion. It happens when your eyes record the scene before them and its image is wrongly interpreted by the brain. If it made no mistakes, such an illusion would not happen.

But [　　]　← 本題

資料②

■下の絵では、どのような錯視が生じるのだろうか



Word Bank

（色が）暗い：dark(形)
（色が）明るい：light(形)
右(左)側の～：～ on the right [left]
チェス盤：chessboard
柱：pillar
物体：object
影：shadow
マス目：square
比べる：compare A and B / compare them

資料③

（下書き用のガイドは裏面参照）

Look at the picture. There is a chessboard and a pillar. and on the chessboard there are two letters, A and B. Which color is lighter, in square A or B? You may say the square B, but look the picture into the squares, and you will see that they are the same color. The shadow of the pillar is on the square B and around it. The color of around the square B looks darker, so the square B looks lighter than it really is.
The picture is an illusion. If there isn't the pillar, the color of square B is lighter than square A. So your brain interpret wrong, though the shadow makes the color of square B dark. The brain is fooled by the information presented to it by the eyes.

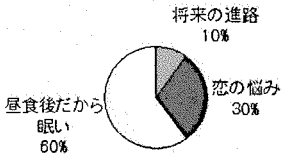
4年　組　氏名

資料④

That's 某 グラフ

英作文です。
自分や身の回りのことについて、勝手にグラフを作って英語で説明してみましょう。
例えば・・・

「今、悩んでいること」のグラフ



[説明英文例]

What am I worrying about now?
Only 10 percent of me is worrying about my future.
30 percent of me is worrying about love. I want to be friends with her, but...
... OK, and as much as 60 percent of me is worrying about the sleepiness.
I have eaten so much ramen at Olive, and I ran a lot with my friends, so my brain isn't working at all!

[英作文の条件]

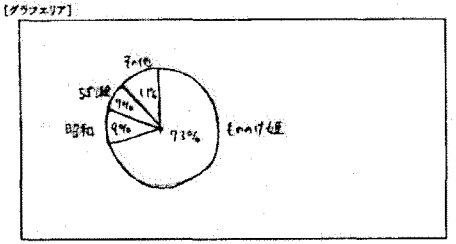
①グラフは、円グラフ・折れ線グラフ・棒グラフ・レーダーチャートなど、どんな種類でもよい。
②英文中でグラフの数値を説明していること。
③as many as, as much as, ... when each one percent is..., some... the rest...など、教科書 Lesson 3 の中の表現を、最低1つは必ず使うこと。
④分量は、5～10文程度。

資料⑤

Class No. Name

[学校祭でやりたいこと]のグラフ

[グラフエリア]



[説明英文]

We answered a questionnaire about a thing which I want to do in the school festival.
As a result as much as about 90 persent of the students want to make "Mononokehime". And only 9% of students want to make retro town. The rest was "Tigirie" or "Meido cafe" or "Europe city" eat...
I want to make "Europe city", but the student who wants to do it was only me. ;;
But I want to make a good showing with fc's friends.
Yes, let's do it!

コメント

資料⑥

Vivid Description

■次の実例を検討してみよう（4年生作品）

The Most Impressive Experience I've Ever Had

① I experienced an important experience in this year. I have played soccer since I was eight years old. My position is goalkeeper. When I was an elementary student, I belonged to a little strong team. Because I used to win a victory. But I could not win a victory in my junior high school days. When I entered high school, I tried to stop playing soccer. I did not want to play soccer very much. But I decided to play soccer again. Because I was invited to the soccer club by my friends. I thought that I had to play soccer seriously.

② A few months later we challenged first meet. The meet is only first grader. I wanted to win the victory with my friends.
We won an elimination round. But it wasn't easy. Our team was not in good condition. My teammates got hurt in the elimination round. Then we challenged semifinal. The rival was the powerful team in the district. We were not afraid of the team. We scored first goal. After that we kept attacking. We scored five goal in the end. And I did not lose any goals.

③ At last we reached the final game. The rival was the strongest team in the district. But we did not give up winning the victory.
The game was one side game. But we kept our goal very hard. I concentrated all my attention on my game. And then, we defended. We won the victory. I was very glad. Our friends and my family were very glad too.

④ I like soccer better than any other things now. And today I enjoyed playing soccer with my friends. I think that it is the most happiest thing in my life. And I want to be the champion team again.